

## 事故は予見されていた

三月一日の東日本大震災により、世の中、一変してしまった。あれからまもなく一か月が経つのに、まだ平常心に戻れない。

被害の大きさもさることながら、最大の原因はもちろん福島第一原発の事故である。多くの人が指摘しているように、地震と津波は天災で、被害がいかに甚大でも、人々は立ち上がって復興への道を進んで行くだろう。しかし原発事故は明らかなる人災で、しかもいまなお事態は進行中。状況は深刻な方向に向かって進んでおり、放射能が復興をはばむ壁として立ちはだかっている。

東電（東京電力）は「想定外の事態だった」といつているけど、ほんとにそうなのか。いいたいことは山ほどある。みなさまにもおありだろう。しかしおそらく、この事故に関しては多くの人が書いて語り語りするだろうから、あえてふれない。いま検証しておきたいのは震災前にだれがどんなことを語っていたかだ。最近出版された原子力発電所関係の本を読んでみた。

### 起こるべくして起きた事故

まず、この事故で一躍注目を浴びている本、広瀬隆『原子炉時限爆弾』である。「大地震におびえる日本列島」という副題通り、来たるべき東海地震を想定し、静岡県浜岡原発を中心に、日本の原

発を抱える危険性を論じたあまりにもタイムリー(?)な一冊だ。

震災前に読んだら「ちよっと脅しすぎじゃねえ?」と感じたかもしれない。しかし、福島第一原発で起きたことを視野に入れながらいま読むと、まるで予言の書に思えてくる。

〈大地震が発生した場合には、すでに物理的な被害が拡大し、交通機関の断絶、通信の不通、ガス・水道・電気の停止、火災などによって地獄の様相を呈している。そこに原子炉の事故による放射能災害が重なり合った場合、どのようなことが本当に起こるか、人類には未経験である。大地震という自然災害によって人々が苦しんでいるところに、未曾有の放射線災害が重なるという最悪の事態になるので、地震学者の石橋克彦氏がこれを「原発震災」と呼んだ。わが国では、住民の避難を含めて、事実上は、何も対策がないと言えるだろう。〉

ひえー、まさしくその通り! 実際に大地震が起きた場合、原発には具体的にどんな不具合が起きるのか。本書が指摘している事態は二つある。

ひとつは配管の破断である。メルトダウン（炉心の溶融）を避けるためには絶えず水で原子炉を冷やし続けなければならないが、水蒸気と水が流れるパイプはすべて一本の回路でつながっており、どこが切れても熱を奪えなくなる。しかも原発を構成する原子炉建屋とタービン建屋のうち、タービン建屋の強度は原子炉建屋とは比較にならないほど弱い。二つの建屋をつなぐパイプが両側からゆさぶられる。それでパイプが正常な状態を保つと考える配管業者がいれば、私は会ってみたいと思うと著者の広瀬は断言するのだ。

もうひとつは発電所内の配線が切れることによる電源の喪失、すなわち「ステーション・ブラックアウト」と呼ばれる状態だ。原発震災を防ぐ鍵を握るのは中央制御室にいる職員だが、仮に彼らが激しい揺れの中で非常用のボタンを押せたとしても、電気系統が切れたらどうなるか。所内が完全停電

になつたらボタンを押しても何も作動しないのだから、原子炉が暴走しているとわかつて、何の手も打てない。時間が経つほど最悪の状態に近づいていく。(地震があつた時に、原子炉そのものはかなり頑丈につくられているが、もし原子炉が無事であつても、事故を防げるかどうかという議論になれば、原子炉の頑丈さにはほとんど意味はないのである。水が流れる回路のすべて、どこにも破壊が起らないということが保証されなければ、大事故は防げないことになる)。

三月一日に福島第一原発で起こつた事態とは、まさにこれだつた。配管の破断と所内の完全停電。しかもそれが六基中、少なくとも四基で同時に起こつた。電気系統がダウンしたことで冷却装置が作動せず、原子炉を冷やすために外から大量の水を注入し続け、その汚染水を貯める場所の確保に大わらわとなり、あげく大量の放射性物質を含んだ汚染水を自ら海に放出し、一方ではどこも確定できない場所からもっと高濃度の汚染水が漏れ続ける……。

さらに、この本には見逃せない事実が記されている。二〇一〇年六月一七日、福島第一原発二号機で電源喪失事故が起こり、原子炉内部の水がみるみる減つて、あわやメルトダウンかという重大事故が発生していたのである。四日前に一帯を襲つた地震があつたものの、根本的な原因は不明。サッカー・ワールドカップの最中だつたこともあり、メディアはこの件をほとんど報じなかつた。これが事実なら(事実なんだけど)、福島第一原発にはすでにミソがついていたわけで、追及を怠つたメディアも含め、今度の大事故は起こるべくして起きた事故といえる。

それだけでなく東電は、原発のトラブル隠しや検査データの捏造をくり返してきた。福島県内の原発に關しても、国と東電がいかに安全性を軽視し、地元を無視した原子力行政を推し進めてきたかは佐藤栄佐久『知事抹殺』に詳しい。前福島県知事である佐藤は、五期一八年にわたる知事時代、県が一切かかわれない原子力行政に疑問を感じ、「原発もプルサーマル計画もすべて凍結」という方針の

下、国と東電相手の闘いに踏み切るが、その結果待つていたのは汚職事件による逮捕という「報復」だつた。原発は国と電力会社の掌中にあり、その安全性に地元が疑義を挟むことすらできない。

### 反原発は「核アレルギー」

反原発運動は一九七九年のスリーマイル島事故や、八六年のチェルノブイリ事故を契機に一瞬盛り上がったが、その後は(宗教がかつた?)イデオロギー闘争と思われてきた節がある。

震災前、人々が原発にどのようなイメージを抱いていたか、ひいては反原発の言説をどうとらえてきたか、その一端は豊田有恒『日本の原発技術が世界を変える』で知ることができる。『原子炉時限爆弾』とは別の意味で、これはいま読むとめっちゃめっちゃおもしろい本である。わつ、こんなこといつてるよ、あんなことも書いてるよ、のオンパレードなのだ。

〈被爆国民という核アレルギーの心情に、ひたすら情緒的に訴えかけられると、誰しも反対に傾きやすい。そのため、原子力は、ともすれば政争の具とされてきた。しかし、核アレルギーという後ろ向きに逃げていけば、すべてが、解決するのだろうか。いや、そんなことはない。知ること抜きにして、原子力を忌避しているだけでは、マイナスの効果しか生み出さない。／このままでは、日本が得意とする最先端産業の芽を、摘んでしまうことになりかねない〉。

以上がこの本の基本的なスタンスだ。

原発反対論を「核アレルギー」の一言で片づける感覚も大胆だが、安全性に關する議論も大胆。日本の原発の安全性を強調するために、豊田は放射線が「いかに安全か」を懇々と説明する。

放射線は宇宙からも降り注いでいるし、地面からも出ているし、人体を含めた生物体からも出ている。(放射線、放射能というと、日本では短絡的に原爆と結び付けられやすいのだが、ごく一般的に

存在するもの)で、(強い放射線でも、ごく短時間の被曝なら、それほど害はない)。しかも日本の原発は(放射能、放射線を外部に出さないように、万全の対策を講じている)。一九九九年のシェー・シー・オーの臨界事故は違法なマニュアルのせい。二〇〇四年に美浜原発で起きた配管の破断事故は、配管の点検を怠っていただけ。〇七年の中越沖地震では柏崎刈谷原発も被害を受けたが、あれは核燃料の保管プールの水が跳ねて外にあふれただけ。むしろ、あれほどの地震で原子炉本体への影響はほとんどなかったのだから(日本の原発の安全性を証明したようなものだ)。

原子炉本体が無事でも、配管や電気系統に不具合が出たらオジャンである、という発想はみじんもないことに驚く。(放射線、放射能を単に恐れてばかりいては、なにも進まない)と考えるのは自由だが、しかし、そういうことをいう人は、立ち入り制限されている福島第一原発の半径二〇キロ圏内に入り、ガレキの撤去でも手伝ったらどうだろうか。

本書の特徴は原発を日本が誇るビッグビジネスとして位置づけていることだ。そして、実際、日本の原子力行政はその線で進んできた。原発を産業と考えれば、安全性は当然二の次になろう。ビジネスはコストとの相談なしには成り立たないからだ。しかし、純粋にコストだけを考えても、原発ほど割に合わない商売はない。たかだか巨大な湯沸かし器のためにいま私たちが支払っている、そして将来にわたって支払われるコストの大きさを考えてみたらいい。あるいは多くの作業員を危険にさらすことなしに地震からの復旧ひとつできない、この産業の野蛮さを。これが排気ガスを出さないクリーンなエネルギーだと喧伝されてきた原発の実態なのだ。

事故発生以来、政府、東電、経産省の原子力安全・保安院、原子力安全委員会、さらに「専門家」と称する御用学者の面々は、大気中や海中に放出された放射性物質の値を示しつつ「ただちに人体への影響が出ることはありません」という樂觀的な情報を流し続けている。週刊誌では論調が分かれる

が(安全に疑問符をつけているのは「週刊現代」「週刊文春」「週刊朝日」。政府や東電並みに寝ぼけているのは「週刊新潮」「週刊ポスト」、朝日、読売、毎日の三大紙をはじめとする大手新聞や、NHKと民放を含むテレビは「大本営発表」をくり返すだけである。

彼らは「福島第一原発以外の原発は安全です」「日本の放射能は安全なのです」と永遠に主張し続ける気だろうか。仮に事故が収束に向かっても、日本はとんでもないツケを払わせられるはずである。責任を曖昧にしてはいけない。だれが何をいつしているか、現在進行形でしっかり見届けよう。(2011.05)

## 原子炉 時限爆弾

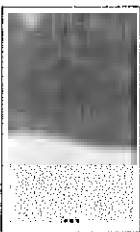
『原子炉時限爆弾——大地震におびえる日本列島』広瀬隆、ダイヤモンド社、二〇一〇年 『東京に原発を！』(八一年)『危険な話』(八七年)などで知られる作家の一五年ぶりの原発本。日本列島が地震変動期に入り大地震の危機が増していること、日本各地で原発事故が多発していることが執筆の動機と思われ、書名はエキセントリックだが内容は実証的。往年の毒舌ぶりも健在だ。

佐藤栄佐久

## 知事抹殺

『知事抹殺』

『知事抹殺——つくられた福島県汚職事件』佐藤栄佐久、平凡社、二〇〇九年 八八年から一八八年知事をした前福島県知事の告発の書。八九年の福島第二原発部品脱落事故、核燃料サイクルに関する約束の反故などから原発政策に疑問を感じた著者は、県民の支持の下、国や東電と対決。二〇〇六年、取締容疑で逮捕される。「国策捜査」を暴いた本だが、福島原発と原発行政の実態を知るうえで有効。



『日本の原発技術が世界を変える』豊田有恒、祥伝社新書、二〇一〇年 八〇年代から日本中の原発を取材してきたと胸を張るSF作家が「世界最高水準」で「世界一安全」な日本の原発技術のすばらしさを説いた本。原発推進派ではなく「原発やむをえず派」というわりには無知なマスコミと感情的な原発勢力に対する罵倒が多い。原発商戦で生き残るには「政官民の一致協力」が不可欠だそうだ。